

もくぞうじゅうにしんしょうりゅうぞう
木造十二神将立像

種 別 小松市指定文化財 彫刻
指定年月日 平成27年11月3日
所 在 地 瀬領町

十二神将とは、仏教における天部⁽¹⁾の神々の1つで、薬師如来の教えとそれを信仰する人々を守るとされる。宮毘羅大将・伐折羅大将・迷企羅大将・安底羅大将・頰爾羅大将・珊底羅大将・因達羅大将・波夷羅大将・摩虎羅大将・真達羅大将・招杜羅大将・毘羯羅大将の12の大将からなる。

この十二神将像は、大正14年(1925)、瀬領村の瀬川清作氏が同村の山の中腹に薬師堂を建てた際、高野山(和歌山県)の寺院から招請して安置したものと言われている。昭和23年(1948)に薬師堂が神明宮⁽²⁾として磯前神社内へ移築されてからは瀬川氏の移転先である小松市津波倉町で保管されたが、昭和40年代に再び瀬領町に戻り、同町公民館に移管された。昭和54年(1979)には瀬領町の永井伝一氏が修復し、昭和55年より現在の湯ノ沢温泉分湯場に安置されている。

造りは木造寄木造⁽³⁾で彩色され、目は玉眼⁽⁴⁾である。また、宮毘羅を除く11体の頭上には、何の動物か識別できないものも一部あるが、十二支の動物を戴く。中世以降の十二神将像の頭上には十二支の動物を表すものが多く見られる。

手足などの写実的な作風から、この十二神将像の製作時期は鎌倉時代後半(14世紀)と推定される。作者は不明であるが優品である。県内では製作時期が鎌倉時代以前に遡る十二神将像は少なく、白山市白峰の八坂神社の十二神将像(平安時代後期)や、輪島市の常田寺の十二神将像(平安時代後期)などに次ぐ、鎌倉時代の十二神将像としてきわめて貴重である。

(1) 天部：古くからインドで信仰されていた神々が仏教に取り入れられたもので、仏の教えや仏を信ずる人々を守るとされる。天界に住む神々ということから天部と呼ばれる。なお、仏像は概ね如来・菩薩・明王・天部・羅漢などに分けられる。

(2) 神明宮：天照大神を祀る建物。

(3) 寄木造：木造仏像の製作技法の1つ。頭と胴部からなる主要部を2つ以上の木材を寄せ合せて造る。

(4) 玉眼：仏像の目の部分の製作技法の1つで、目の部分の内側から水晶やガラスをはめ込む。

